

The Japan Society for Intercultural Studies

日本国際文化学会 ニューズレター

第8号 2005年12月13日発行

編集・発行

日本国際文化学会事務局

〒520-2194

滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5

龍谷大学瀬田学舎 日本国際文化学会事務局

TEL/FAX 077-543-7866

<http://www.world.ryukoku.ac.jp/~wwjsicsm>

第4回全国大会 法政大学で開催

第4回全国大会は、2005（平成17）年7月2日（土）・3日（日）
法政大学市ヶ谷キャンパスで、開催されました。



シンポジウムでは、「国際文化学の中の日本学」が取り上げられました。この内容につきましては、「インターカルチュラル」第4号に掲載する予定です。

共通論題では、「インターカルチュラルの開く可能性－国際文化学の構築に向けて」、「日韓大衆交流文化の現在－『韓流』と『日本』のはざままで」、「ナショナリズムと文化」、「文化外交の最前線－外交における『文化』と日本の『パブリック・ディプロマシー』」、「開発援助と組織の変化」、の五つのテーマが取り上げられました。この中から「ナ

ショナリズムと文化」については、概要が同じく「インターカルチュラル第4号」に掲載される予定です。

自由論題は8つの分科会に分かれ、26本の報告が発表され、質疑応答が行われました。

また今回は新たな試みとして、国際文化学部、学科の教育、就職等の会員の関心事について情報、意見交換をするための場として、“フォーラム”を設け、「スタディー・アブロード・プログラムの課題と展望」、「国際文化学部・学科における就職支援」の二つのテーマを取り上げました。

第5回 全国大会の お知らせ

日本国際文化学会第5回全国大会を下記要領で開催いたします。ご参加いただきますようお願い申し上げます。

○日 時：2006（平成18）年7月15日（土）、16日（日）

○場 所：東北大学川内北キャンパス

○連絡先：〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

東北大学大学院国際文化研究科 浅川照夫

tel & fax：022-795-7531 mail：asakawa@mail.tains.tohoku.ac.jp

研究会の報告

2005年10月29日(土)東北大学国際文化研究科1階会議室にて第7回研究会が開かれました。
報告者は東北大学教授佐藤勢紀子氏で、以下は報告者による要約です。

『源氏物語』における仏教思想 —宿世・無常・方便—

1. はじめに

『源氏物語』の主要人物がその人生を振り返って総括するとき、仏教思想に根ざす様々な思いが複雑に絡み合って表明されている。男性の主人公——光源氏と薫においては、宿世、無常、そして仏の方便が思われている。一方、藤壺、紫の上、浮舟などの女主人公では、自らの宿世が思われるのが常で、それに無常の思いがともなう場合もある。

本発表では、そうした主要人物の人生回顧の場面で現れる宿世、無常、そして方便の思いを、『源氏物語』における仏教思想の3つの重要な要素としてとりあげ、その相互の関係を明らかにする。その上で、近年まで十分に考察されていなかった方便の思想に焦点を絞り、この物語における位置づけを試みる。

2. 先行研究

『源氏物語』の仏教思想について体系的かつ網羅的な研究を行った重松(1967)は、その中心思想として、宿世、無常、罪業をあげ、詳細な分析を施しているが、方便の思想については、その表れが10例程度にすぎないせいか、軽く言及するにとどまっている。また、同書によれば、宿世と無常の思いはほとんど関係のない別々の思いであるという。

岩瀬(1972)と高木(1980)は『源氏物語』における方便の思いに注目し、『法華経』の二大要品である方便品と如来寿量品の方便の思想にもとづくものとしているが、その根拠は十分に示されているとは言いがたい。

3. 宿世と無常の関係

『源氏物語』の作中人物の宿世の思いと無常の思いには、実は密接な関連がある。一言で言えば、男性は「無常を知るべき宿世」を認識し、女性は「無常を体現すべき宿世」を自覚するというパターンが見られる。

女性による宿世の自覚について、佐藤(1995)により、説明を加えよう。帚木巻に「女の宿世はいと浮かびたるなんあはれ」という言葉がある。「宿世」は一般に、前世の業因にもとづく現世の果という意味で使われており、人間の意志では変更できない絶対的なものとされている。その「宿世」が「浮かびたる」とは、どういうことなのだろうか。

これに関して、『源氏物語』における「宿世」の用例120例を対象に、宿世の思いの主体と客体について調べたところ、男性は宿世を思う傾向、女性は思われる傾向が強いことがわかった。特に、紫上や宇治の3人の女君など物語のヒロインたちは、他者に頻繁に自分の宿世を思われていながら(10~30例)、ほとんど宿世を思っていない(1~3例)。

それはなぜかと言えば、女性が「宿世」の代わりに「身」を含む表現、特に「憂き身」、「身の憂さ」などの表現を使っているからである。こうした「憂き身」表現は93例にのぼり、ほぼ女性専用の用語となっている。そして、「憂き身」が「浮き身」でもあることは、既に歌語の世界での決まりごとであった。

結局、『源氏物語』に登場する女性たちの自己認識は、「浮きて世を経る身」(浮舟巻)という浮舟の言葉に集約されるものであって、さすらい続けるべく定められた身——無常を体現すべき宿世ある身ということになる。先の「宿世はいと浮かびたる」という言い方は、宿世自体の性格ではなく、宿世の表れとしての女の人生の様相を表現しているのだ。

ろう。

『源氏物語』において、宿世の思いと無常の思いは、とりわけ女性の自己認識において、深いところで繋がりを持っていると言える。

4. 宿世と方便の関係

次に、宿世と方便の関係について考えてみよう。『源氏物語』では、正編の主人公源氏と続編の主人公薫が、ともに仏の方便——衆生救済のための特別のはからい——を意識しているが、その方便の思いと宿世の思いの関係の仕方は異なっている。源氏は、「世のはかなくうきを知らずべく、仏などのおきてたまへる身」（幻巻）と、仏の方便があらかじめ宿世を規定しているととれる言い方をしているが、薫の場合は、仏の方便と宿世のはたらきは別個に捉えられている。薫の意識では、「例の人にてながらふるを、仏などの憎しと見たまふにや」（蜻蛉巻）、「心きたなき末の違ひめに、思ひ知らするなめり」（同）とあるように、仏の方便は、人間の行為に即応して行われるものとなっている。

このことは、仏についての見方が、『源氏物語』正編と続編で変化していることを示唆している。正編の仏は過去の仏であるが、続編の仏は現在の仏である。この変化の背景には、紫式部が師事したと伝えられる檀那僧正覚運が重視していた、『法華経』の久遠実成思想があるのではないかと推察される。

5. 方便の思想の位置づけ

最後に、方便の思想の『源氏物語』における位置づけについて考えてみよう。方便の思想は、この物語において、2つの重要な役割をはたしている。そのひとつは、『源氏物語』創作の意義づけということである。

『源氏物語』蜩巻に、光源氏が物語論を展開する場面がある。この物語論の趣旨は、物語が「そらごと（虚言）」ではないということであるが、その論証の過程で仏教の方便の概念を借りて、物語創作行為を正当化しているのである。これは、文学を「狂言綺語」と見る仏教の否定的文学観に対する、物語作者なりの反論であったと考えられる（佐藤1998）。この物語論で言われる「方便」は、『法華経』方便品および薬草喻品、そして、天台大師の『法華玄義』

の「一音説法」の教説をベースにしていると見られる。

方便の思想のもうひとつの役割は、先にも見たように、登場人物の人生についての感懐を特徴づけ、この物語の思想基盤の重要な部分を形成していることである。

たとえば、宿木巻において、宇治阿闍梨は仏教故事を引用して仏の方便にふれ、薫の道心を讃えている。この故事の典拠は密教の中心経典『大日経』の注釈書である（高木1980）。また、前引の薫の人生回顧でも、「仏のしたまふ方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ」（蜻蛉巻）と、仏の方便が直言されている。その典拠は『法華経』随喜功德品および『大日経』の「三句の法門」であると考えられる。さらに、最後のヒロイン浮舟に宛てて横川僧都が書いた還俗勸奨の手紙も、『大日経』注釈書所載の菩薩の方便に関する例話にもとづいて書かれている（佐藤2000）。

結局のところ、『源氏物語』は、二重の意味で、方便の思想、とりわけ天台密教における方便の思想に支えられているのである。

6. おわりに

近世以来、『源氏物語』の仏教思想面からの研究は、国学思想の盛行、明治以降の国家神道の唱導、欧米の文学理論の受容などの影響で、概して低調であった。しかし、国際文化研究の視点からも、この方面の研究の意義は大きく、今後の研究成果が期待される。

文 献

- 岩瀬法雲 1972.『源氏物語と仏教思想』笠間書院
高木宗監 1980.『源氏物語における仏教故事の研究』桜楓社
佐藤勢紀子 1995.『宿世の思想—源氏物語の女性たち』ペリかん社
-----1998.「紫式部の物語観—狂言綺語の文学観への対応として」『季刊日本思想史』52
-----2000.「横川僧都の消息と『大日経義釈』—還俗勸奨を支える論理」『日本文学』49-6
重松信弘 1967.『源氏物語の仏教思想—仏教思想とその文芸的意義の研究』平楽寺書店
(東北大学国際交流センター 佐藤勢紀子)

常任理事会報告

第21回

2005年5月28日(土) 13:30~16:00

法政大学ボアソナードタワー25階B会議室

1. 第4回全国大会の運営について
2. 第5回全国大会の日程等について
3. インターカルチュラルの編集体制などについて
4. 名簿の作成について
5. その他

第22回

2005年7月2日(土) 9:00~10:00

法政大学ボアソナードタワー25階C会議室

1. 第4回全国大会の運営について
2. その他

第23回

2005年10月29日(土) 14:00~16:00

東北大学国際文化学研究所棟第1会議室

1. 第5回全国大会について
2. インターカルチュラルについて
3. その他

●日本国際文化学会では、「会員名簿」を刊行することに致しました。つきましては、皆様に「名簿に関するアンケート」を送付しますので、ご協力頂きますようよろしくお願いいたします。

information

日本国際文化学会では、毎年度学会誌「インターカルチュラル」を発行しております。現在の編集長は熊田泰章副会長(法政大学)です。バックナンバーをご入り用の方はアカデミア出版会(TEL.075-771-7055)までお問い合わせください。



「インターカルチュラル1」
2003年7月30日発行



「インターカルチュラル2」
2004年5月20日発行



「インターカルチュラル3」
2005年4月30日発行